文化

市町村史で継ぐ沖縄戦 □1□

川満彰

沖縄戦から75年が経過する中、県内各市町村は、沖縄戦体験を調査し地域ごとの戦争の特徴や、そこから得られる教訓なども市町村史にまとめてきた。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、自宅にいる時間も増えている中、より身近な地域の戦争体験を学ぶ機会を設けていくことも期待される。近年、市町村史の沖縄戦編や戦争編を発刊した市町村の担当者や沖縄戦研究者らに戦争体験を市町村史で伝えていくための試行錯誤や課題などについて寄稿してもらった。

◇　◇

2016年の『名護市史本編・3 名護・やんばるの沖縄戦』（以下『本編・沖縄戦』）刊行をきっかけに、『写真から見る名護の沖縄戦 資料編1』（2017年）、『沖縄戦時下における名護・やんばるの疎開と関係資料 資料編2』（副題：2018年）、『米軍政府と民間人収容地区1945―1946年 資料編3』（2019年）を刊行した。それを支えてくれたのは約500人の戦争体験者の証言であり、それを裏付ける資料収集である。

大浦崎収容地区（名護市辺野古の現・米軍キャンプ・シュワブ）とみられる場所で生活する住民ら＝1945年7月9日（県公文書館所蔵）

かわみつ・あきら　1960年、コザ市（現・沖縄市）に生まれる。2006年、沖縄大学大学院沖縄・東アジア地域研究専攻修了。現在、名護市教育委員会文化課市史編さん係会計年度任用職員。主な著者・論文に『沖縄県史　各論編6　沖縄戦』「秘密戦」「御真影奉護隊」など。

名護市史 北部疎開と戦闘

収容期も〝戦争状態〟

継承へ感性、想像力育む

敗残兵の残虐事件

中南部と北部の沖縄戦を比較すると、日米両軍の戦略によってその場所に居た住民の巻き込まれ方が違うことがわかる。その視点で日米両軍の北部戦略に疑問符を打つと、大本営は、①なぜ中南部住民を北部へ疎開させたのか、②なぜ北部に北上するが、殺到して来たのは米軍攻撃が始まった3月23日以降である。

他方米軍は、③なぜ北部南部住民は雨の中、ずぶ濡れになり、食糧もなく逃げるようになった。護郷隊の目的は第三十二軍壊滅後に潜伏し続け遊撃戦をもって基地を攻撃することであった。他方、遊撃戦略の一つに住民への防諜活動もあった。北部では国頭支隊長宇土武彦指示のもと、国士隊という村の有識者らで住民が住民を監視するという組織を結成していた。もともと日本軍は住民が米軍の捕虜になると、陣地や兵士数などの機密情報が漏れることと恐れていた。国士隊がどこまで日本軍と密に関わっていたのかは不明だが、北部では白石部隊が、住民が関与したと考えられるスパイ容疑者リストの手帳を持ち、住民虐殺を繰り返していた（『本編・沖縄戦』）。

戦力不足を、少年や村の有識者らで補うほどの北部戦略を見ると、中南部と比べ北部は第三十二軍の捨て石であり、大本営にとって「捨て石の捨て石」だったのであろう。

一方、米軍も本土決戦に備え中継補給・航空基地確保を目的に沖縄島に上陸した。米軍の戦略は緻密で、北・中両飛行場（現読谷村役場周辺・現嘉手納飛行場）を奪うと同時に第三十二軍が待ち構えていた中部以南に戦闘部隊を進攻させる一方、石川地峡以北に軍政府部隊を送り込み、民間人収容地区を設置した。4月9日頃には旧羽地村一帯（一部を除く）に田井等民間人収容地区を設置している。米軍は戦場を逃げ回っていた住民を、設置した収容地に強制的に押し込んだ。名目は戦場からの「保護」だが、それ以上に計画していた基地確保・建設のため、住民を排除したのである。1945年8月末、約33万人の人々が収容されていた（『本編・戦争』『資料編3』）。

人権はく奪

『本編・沖縄戦』は民間人収容地区関連に多くのページ数を割いている。刊行が他市町村と比べ後発だったことを長所に、他『市町村史』に記された証言の役割は大きかった。事前に北部住民の証言をもとに現名護市域にあった13カ所の民間人収容地区の公共施設を地図に落とし込み、全てではないが南部まで足を運び、地図を見ながら当時の様子を聞き取った。

多くの体験者は収容期を「戦後」と呼ぶ。だが「トイレは男女共同で仕切りもなかった」「マラリアで毎日のように人々が死んでいった」等の証言や各『市町村史』・『字誌』の証言を見ると、人権がはく奪された収容地区の様子は、戦後生まれの筆者らからすれば戦争状態である。民間人収容地区の暮らしを記録することは、名護市民だけでなく各市町村民の戦後生活の端緒を知る一助となる。

住民の立場から見ると、なぜ大本営・政府は保護すべき非戦闘員が五十数万人もいたにもかかわらず沖縄島で地上戦を決断したのか。なぜ米軍は大勢の非戦闘員の存在を知りながらも沖縄に上陸してきたのかという疑問が出る。「軍隊は住民を守らない」。

『本編・沖縄戦』部会長の東江平之氏（元名桜大学長）は「戦争体験を継承する責任は、何時の時代でも戦争を知らない世代が感性と想像力を磨いて担うべきものである」と述べている。名護市史の継承責任は「感性と想像力」を育む素材として今年度、証言集『語りつぐ戦争　第4集』を刊行することであり、これまでの『沖縄戦編』シリーズを積極的に普及することである。